



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	ASD児・聴覚障害児のナラティブに関する文献検討(fulltext)
Author(s)	岩田,能理子; 濱田,豊彦; 喜屋武,睦; 天野,貴博; 鈴木,友里恵; 石坂,光敏
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 68(2): 245-256
Issue Date	2017-02-28
URL	http://hdl.handle.net/2309/146997
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

ASD児・聴覚障害児のナラティブに関する文献検討

岩田 能理子*¹・濱田 豊彦*²・喜屋武 睦*¹
天野 貴博*¹・鈴木 友里恵*¹・石坂 光敏*³

支援方法学分野

(2016年9月13日受理)

1. はじめに

私たちは日常的にコミュニケーションを行いながら生活を営んでいる。コミュニケーションとは、「人々がいろいろな記号を用いて、記号システムとしてのメッセージを構成し、それを通路である一定のチャンネルをとおして伝達あるいは交換する過程」(下中, 1981)と定義される。最近のコミュニケーションに関する研究として、メッセージの内容と伝達あるいは交換に関わるナラティブが注目されている。

ナラティブとは、話し手によって語られたもの(=物語)と、語るという行為そのものも含意して、日本語では「物語り」と表記されることが多い(保坂, 2014)。ナラティブは語られることによって成立し、ナラティブの内容は語り手の意図・関心や出来事に対する位置づけによって変容し、意味づけられ、構成される。したがって、同じ経験をしたとしても、語り手によってナラティブの内容は異なる(能智, 2006; 仲野・長崎, 2009)。また、ナラティブには構成された話の内容を他者に伝える行為そのものも含まれている(能智, 2006)。これらの定義から、李・田中(2011a)は、ナラティブについて「ある出来事について組織化し、意味づけ、他者に伝える行為」としてまとめている。そして、ナラティブに関する研究のアプローチとして、3つの観点があるとされている。その観点とは、①言語的構造に着目した観点、②認知構造に着目した観点、③テキストそのものについての観点である(保坂, 2014)。

聴覚障害児の言語獲得を扱った研究では、複数の文章を扱う総合的な能力として、ナラティブではなく談話(ディスコース)という用語を主として用いることが多いが、本研究の中では特に分ける必要がない場合はナラティブという用語で統一して用い、先行研究で談話等の用語で記されているときにはそのまま記述することとした。

ところで、自閉症スペクトラム障害(Autistic Spectrum Disorder, 以下ASDとする。)は、社会性の障害、コミュニケーションの障害、想像力の障害といわれ(DSM-IV: American Psychiatric Association, 1994)、コミュニケーションはASD児の中核の障害といえる。特にコミュニケーションに関して、ASD児は音韻論的・構文論的能力に比べ意味論的・語用論的能力に特異性があるといわれている(Wetherby & Prutting, 1984; Tager-Flusberg, 1981)。また、視覚刺激の全体より部分を優先して捉える傾向(Happe & Frith, 2006)や、刺激に過剰に反応する傾向(Frith, 2003)があるなど、認知の面においても何らかの特異性があると言われている。ナラティブについて研究することで何らかのASD児の言語的構造や認知的構造の特徴が明らかになるのではないか、と注目されている。

一方、聴覚障害児も聞こえにくさにともない、言語面において何らかの遅れや特異性がみられる(Blanton, R.L., 1968; 内山ら, 1978)。また、認知面については、聴覚障害者は聴者と比較して視覚情報を敏感に反応するため優れた周辺視野をもち、特異な視空間認知能力を発揮すると言われている(深間内, 2007)。

*1 東京学芸大学大学院

*2 東京学芸大学 特別支援科学講座 支援方法学分野 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

*3 東京都日野市立東光寺小学校 (191-0002 日野市新町3丁目24-1)

さらに最近では、ASDを併せ有する聴覚障害児の存在についても注目されつつある（大鹿・濱田ら、2014）。ASD、聴覚障害の両障害ともに言語面、特に語用面で困難がみられる。したがってASDを併せ有する聴覚障害児の支援を考えるにあたって、児童の困り感はASDによるものなのか、それとも聴覚障害によるものなのか明らかにし、支援につなげていく必要があると考えられる。

そこで本稿では、これまでの先行研究を概観し、これらの知見から①ASD児の言語面における遅れや特異性について、②聴覚障害児の言語面における遅れや特異性について、そして③ASDを併せ有する聴覚障害児の指導・支援に関して今後検討すべき点を提言することを目的とする。

2. ASD児

2. 1 心の理論とナラティブの関連を扱った研究

Colleら（2008）は、ナラティブを行う際、聞き手が何を知っていて、何を知らないのか、どのような情報を提供すべきかを判断する必要があるとし、聞き手に対する意識が必要だと述べている。また、李・田中（2011b）は、ナラティブを行うことは、自分と他者の関係あるいは、人と人との関係をとらえたり、他者の状態について注目したりすることになると述べている。熊谷（2004）は、ナラティブとして語ることにより、現前の「わたし」や「あなた」ではない「第三者」の立場や意図を表現することが可能になり、ナラティブが心の理論の発達に必要とされることを主張している。これらをまとめ、仲野・長崎（2009）は、ナラティブは心の理論を必要とするものであり、ともに育むものであるという見解を示している。しかし、ASD児は心の理論の獲得が難しいことが指摘されている（Baron-Cohenら、1985等）。

2. 2 ASD児の言語理解の特性を扱った研究

先述したようにナラティブに関する研究のアプローチの一つに、言語的構造に着目した観点がある。この観点では、語り手が出来事をどのように位置づけ、何についての内容を語るのかが分析対象となる。そして、ナラティブを構成するためにどのような統語論の装置を用いるのか、意味論としての組織化がどのようになされるのかが分析される（保坂、2014）。以下、ASD児の統語論や意味論についての知見、具体的にはASD児の指示語の理解（伊藤・田中、2006）、ASD児の連体修飾語の意味理解（根岸・大伴、2014）、言

語学習能力診断検査（ITPA）を用いたASD児の言語面の課題検討（山田・笠井、2011）について概観していく。

伊藤・田中（2006）は、ASD児の指示語の理解について検討している。指示語の示す位置は、話し手の場所によって異なってくる。そこで、話し手と聞き手が同側に位置する条件と、逆側に位置する条件を作成し、自閉症児（平均年齢8.07歳、14名）と定型発達児（平均年齢5.91歳、33名）を対象に、指示語「こっち・そっち・あっち」を言語教示したときの指示語の理解について検討を行った。その結果、①定型発達児は同側条件・逆側条件での正答率に差はなかったが、自閉症児では同側条件と比較し、逆側条件において有意に正答率が低かった。また、②自閉症児は定型発達児と比較して、先に実施した条件における視点に固定してしまう傾向が有意に強かった。さらに、③定型発達児では言語教示のみの曖昧さを補うために、話者の顔の向きや視線を手がかりにしたり、指示対象の特定に悩んだりする様子が見られたが、自閉症児ではそれらの様子が見られることは少なかった。伊藤・田中（2005）は、これらの要因について他者視点習得能力と知的能力という認知機能で検討を行ったが、要因を特定するまでには至らなかった。

根岸・大伴（2014）は、ASD児の連体修飾語の意味理解について、形容詞・形容動詞の用法から検討を行っている。複数の意味をもつ形容詞・形容動詞の獲得について、単にその語の意味を知っているか否かではなく、1つの語をどれだけ多様な対象に適用できるか、実際の場面と合致させられるか、といった観点から検討を行っている。具体的には、複数の意味をもつ形容詞・形容動詞を用いて、形容詞・形容動詞＋名詞（適用範囲課題）、形容詞・形容動詞を含む文章（状況文課題）をそれぞれ複数作成し、日本語の表現としての適否判断を定型発達児（32名、平均年齢8歳2カ月）とASD児（14名、平均年齢8歳4カ月）に行わせた。その結果、適用範囲課題では、両群ともに語彙年齢（以下、VAとする。）との関連がみられ、ASD児は定型発達児と比較して有意に成績が低かった。また、両群ともに、形容詞・形容動詞の基本的用法から遠ざかるほど成績が下がった。状況文課題では両群の成績に有意差は見られなかった。しかし、定型発達児群のみでVAと成績の相関がみられた。また、VA・CA（生活年齢）の要因を取り除き、適用範囲課題と状況文課題の関連について検討したところ、ASD群においては強い相関がみられた。この結果から、定型発達児では、状況文課題の遂行にVAが関連する一方

で、ASD児ではVAだけでは測れない意味理解に関する能力が関連すること、適用範囲課題と状況文課題に共通する判断の基盤があることが示唆された。

ASD児のコミュニケーション・言語行動における困難さについて、山田・笠井(2011)はITPAをもとに明らかにしようとしている。高機能広汎性発達障害児18名、アスペルガー障害児44名、知的障害のない特定不能の広汎性発達障害児39名、計101名(生活年齢5～6歳)を対象に行った。その結果、全検査評価点では定型発達児の平均と比べて明らかな遅れは認められなかったものの、下位項目の「ことばの類推」「ことばの表現」「文の構成」評価点では正常範囲を有意に下回り、聴覚一音声系の処理、文脈理解、意味カテゴリーの運用に課題があることが示唆された。

これらの知見から、ASD児の指示語の言語理解、形容詞・形容動詞の連体修飾語の言語理解ともに、定型発達児と比較して成績が有意に下がることが明らかになった。しかし、その原因については明らかにすることができなかった。一方、ITPAを用いて明らかになったASD児の言語面の課題は、聴覚一音声系の処理、文脈理解、意味カテゴリーの運用の3点があると指摘された。この結果から、今後ASD児の言語理解における困難さは、上記の3点にも原因があるのかについて検討する必要があると示唆された。

2. 3 ASD児のナラティブ(語ったもの)を扱った研究

ASD児の言語理解に関する研究だけでなく、ASD児が実際に自由に語ったもの(ナラティブ)からASD児の言語面について分析する研究が行われている(伊藤, 2006; 伊藤・大嶋, 2014; 佐竹・小林, 1989)。

伊藤(2006)は、自閉症児(2名, 生活年齢5歳2カ月・6歳1カ月)と定型発達児(2名, 生活年齢2歳8カ月・2歳9カ月)の母子自由遊び場面における指示語の表出と非言語手がかりの活用について検討を行っている。その結果、自閉症児は定型発達児と比較し、コ系(これ, この等)指示語の表出が多く、ソ系(それ, その等)指示語の表出が少ないことが明らかになった。また、聞き手に非言語手がかりを与えることも有意に少なかった。この結果は、①他者視点習得が困難であること、②非言語手がかりを指示対象特定に十分活用しないために適切な指示語の使い分けが困難であること、③対人志向性の乏しさが言語表出に関連していることを示唆している。

伊藤・大嶋(2014)も、代名詞を使用する語りの場

面において定型発達児(2名, 生活年齢2歳8カ月・2歳9カ月)は視線や指さしなどの対象を特定するための非言語情報を使用するのに対し、ASD児(2名, 生活年齢5歳2カ月・6歳1カ月)は指示語使用場面でもこのような非言語情報を使用する頻度が少ないことを指摘している。

佐竹・小林(1989)は、自閉症児(1名, 生活年齢6歳2カ月～7歳4カ月)と定型発達児(1名, 生活年齢6カ月～1歳5カ月)を対象に、一対一の自由遊び場面における語用論的伝達機能について縦断的に研究を行った。語用論的伝達機能には、大人を介して物理的必要性を満たす反応(環境的相互作用伝達機能)と、大人を巻き込んで子ども自身に注意を向けさせる反応(社会的相互作用伝達機能)がある。定型発達児では、発達初期から環境的相互作用伝達機能がみられ、階層的に社会的相互作用伝達機能も発達した。一方、自閉症児は、環境的相互作用伝達機能はみられたものの、社会的相互作用伝達機能はほとんど出現しなかった。

一方で、伊藤・大嶋(2014)は、ASD児が「好みの項構造(Du Bois, 1987)」を談話場面で有するかについての検討を行った。「好みの項構造」とは、他動詞の主語は談話においてすでに述べられた旧情報を担うことが多く、語彙化されにくい、他動詞の目的語と自動詞の主語は、他動詞の主語に比べ新情報を担うことが多く、語彙化される傾向が強いという制約のことである。ASD児(2名, 生活年齢2歳8カ月・2歳9カ月)と定型発達児(2名, 生活年齢5歳2カ月・6歳1カ月)を対象に、母子自由遊び場面における発話データを作成し、検討を行った。その結果、「好みの項構造」と一致した言語パターンが両群ともにみられ、情報を提供する構造や談話の語用論的な制約に対する感受性をASD児も定型発達児と同様に有することが示唆された。

これらの知見からASD児は聞き手を意識して話すことが難しく、非言語情報をあまり用いないことが共通に記されていることが分かった。一方で、ナラティブ場面においてASD児も定型発達児と同様に、「好みの項構造」を用いていることが明らかになった。

ところで、ナラティブの分類には、「空想のストーリーについて語るフィクショナルストーリー(FN)」と「自分の経験について語るパーソナルストーリー(PN)」に二分する方法がある(李・田中, 2011a)。以下、FNとPNに関わる条件を定めて語られたナラティブについて分析した知見(李・田中, 2011b; 仲野・長崎, 2006; 石坂ら, 2015)を概観していく。

李・田中 (2011b) は、定型発達児 (年長児15名、小学低学年15名、小学高学年15名、計45名) とASD児 (年長児4名、小学低学年9名、小学高学年10名) を対象に、セリフのないアニメーションを視聴させて、その内容について説明させるFNの課題を行った。その結果、定型発達児と比較して、ASD児は登場人物の心的・情動的状態に関する言及が少ないこと、言動と心的・情動的状態を関連づける言及が少ないこと、一貫した視点から話を構成したり、心的・情動的状態を中心に登場人物間の人間関係を言及したりすることが少ないことが分かった。このことから、ASD児は、登場人物の心的・情動的状態から出来事を理解していくことの弱さを有していることが示唆された。

仲野・長崎 (2006) は、定型発達児 (6歳児6名、7歳児6名、8歳児6名、計18名) と自閉症児 (3名、16歳2カ月・16歳7カ月・17歳0カ月) を対象に、FNとPNの様子を観察し、ミクロ構造とマクロ構造の両側面から分析を行っている。ミクロ構造の分析とは、接続詞や指示詞などの使用頻度をみる結束性や文法の適切さを評価する文法の分析、人物や活動を表現する際の語彙の豊かさを評価する語彙の多様性についての分析のことを言う。マクロ構造の分析とは、ナラティブ全体がどのように構成されているのかに関する分析のことを言う。その結果、自閉症児は全体的に定型発達児よりも成績が低く、ミクロ構造が未発達であるゆえに、マクロ構造も低次元レベルにとどまっていた。一方で、対象児によってはミクロ構造のレベルが高次でも、マクロ構造レベルでは困難を示しているケースもあった。また、自閉症児はPNにおいて特に困難を示し、その要因として自己の経験を意味づけて表現したり、個々の出来事を相互に関連づけて構成したりすることが苦手であることと考えられた。

石坂ら (2015) は、ASD児 (1年生4名、2年生5名、3年生6名、4年生7名、5年生1名、6年生6名、計29名) を対象に語彙・文法能力に関する標準化された検査と、ナラティブを測る検査として4コマ漫画の内容を説明するFNの課題を行った。その結果、語彙・文法能力の低さがナラティブの困難さと関連する児童もいれば、語彙・文法能力が高くてもナラティブの結束性が乏しい児童や、主題とは無関係な話をする整合性の弱い児童がおり、さまざまな類型が存在することが推察された。このことからASD児の支援については一律のマニュアルを作成することは難しく、一人ひとりにあった支援を考える必要があることが示唆された。

これらの知見から、ASD児がナラティブを語る際、

登場人物や他者の心的・情動的状態に関する言及が少ないこと、ナラティブの内容に統語的・語用的言語側面との関与が見られることが示唆された。一方で児童の個人差もみられ、特性ごとに類型化を行う必要があることが考えられた。

2. 4 ナラティブに対する支援を扱った研究

コミュニケーションに課題があるとされるASD児のナラティブに対する支援はさまざま行われている。佐竹・小林 (1989) は、自閉症児 (1名、生活年齢6歳2カ月～7歳4カ月) を対象にボールでのやりとり行動の訓練を行い、伝達機能に及ぼす効果を検討した。その結果、最初はボールのやりとりをすることができなかったが、ボールでのやりとりができるようになると、それに伴いコメントや友好表示、投げる方向を示す差し出しが増加したことを報告している。

しかし、大井 (2002) は、ASD児における語用の課題の広大さと根深さや、支援の難しさについて指摘している。ASD児の語用課題の広大さとは、コミュニケーション時の語用について、1つ1つ明示的に書き示すとすると膨大な量となり、たとえ1回1回のやりとりを覚えたとしても、状況によって相手が求める反応は異なることを示す。そしてASD児の語用課題の根深さとは、補完し合っているはずの言語情報と非言語情報が伝えたい内容と一致していないことが多く、相手に困惑や誤解を招いてしまう場合があることを示す。これらの課題に対して、「心の理論」や感情認知など他者理解に焦点を当てた指導を行っていても、語用障害の基底に対しては働きかけておらず、日常場面における伝達の改善につながっていないことが指摘されている (Silver & Oakes, 2001)。一方で、大井 (2002) は、実行可能な支援方法として①周囲とのコミュニケーションの崩壊を修復すること (ASD児が不適切な言語行為を行ったら、それに対して会話をやり直させたり、指摘したりすること)、②周囲が効果的なコミュニケーション戦略を用いること (ASD児の伝達について理解するとともに、周囲もASD児に伝わりやすいよう曖昧な表現を使わないこと)、③ASD児同士の仲間体験機会をもつことを提案している。

これらの知見から、ASD児のナラティブに対する支援の難しさがみられるものの、ASD児を取り巻く周囲の人々やASDの人同士で繰り返し適切なコミュニケーションを行うことによりナラティブについての改善がみられることが読み取れた。

2. 5 ASD児の言語と認知を扱った研究

先述したようにナラティブに関する研究のアプローチの一つに、認知構造に着目した観点がある。認知構造に着目した観点とは、語り手が言語化を行う際、自然と（あたりまえに）使用する既存の言語的・認知的慣習に従うが、その「あたりまえ」とは何かを探るものである（保坂, 2014）。また、大井（2002）は、語用論的能力の問題は、非言語情報処理の失敗、一次的には注意、知覚、記憶、感情、他者理解の障害を基盤として生じ、その典型かつ極端なケースがASD児において認められると述べている。さらに、李・田中（2013）は、特にFNを行うためのプロセスとして、視線による情報入力を行う第一段階、情報を統合してFNを構成する第二段階、構成した内容に加え、聞き手に伝える際の工夫や調整を行う第三段階があるとしている。そこで、ASDの認知の側面、特に視覚認知についての知見（Loveland, 1991; 永瀬ら, 2013; 李・田中, 2013）について概観していく。

Loveland（1991）は、人間的環境を知覚することの失敗について社会的アフォーダンスの障害と呼んでいる。ASD児は人形劇を見ても、おもちゃの物理的特徴のアフォーダンスを用いるため、一般的な意味を取り込めず、特異なアフォーダンスを利用してしまふことが指摘されている。

永瀬ら（2013）は、漫才とコントを用いてユーモアの楽しみ方と視覚による情報入力との関連について検討している。具体的には、ASD者（漫才：平均年齢16.31歳、6名、コント：平均年齢15.2歳、36名）と定型発達者（漫才：平均年齢15.1歳、21名、コント：平均年齢14.1歳、32名）を対象に、漫才とコントの動画を見せ、その時の視線の動きと笑いの表出について測定し、ユーモアの面白さについて評価させた。その結果、定型発達者と比較して、ASD者は①人物の顔以外の部分を注視すること、②大きい動作に笑いを表出すること、③コント刺激の方が、漫才刺激よりも面白いと評価することがわかった。

また、李・田中（2013）は、ASD児の絵本における視覚認知について検討している。具体的には、ASD児（小学生4名、中学生8名、高校生以上20歳未満10名、計22名）と定型発達児（小学生5名、中学生13名、高校生以上20歳未満4名、計22名）を対象に、絵本を読ませ、そのときの視線の動きを測定するとともに、絵本の内容について語らせた（FN）。その結果、ASD児と定型発達児の視線の動きに違いは見られず、視線の動きとFNの関連は見られなかった。しかし、児童の中にはFNの内容として、背景について語っていた

にもかかわらず、登場人物に対して注視している者もいた。したがって、視線以外の情報入力の特性に関する検討と、視線における情報入力とFNの構成との乖離についての検討を行う必要があると示されている。

これらの知見から、ASD児の視覚認知については、定型発達児と比較して特異性がみられることが明らかになった。しかし、情報入力の第一段階とされる視覚認知とナラティブの関連に関する知見は少なく、今後検討を行っていく必要があると考える。

3. 聴覚障害児

3. 1 聴覚障害児の言語面を扱った研究

聴覚障害児の言語面について、多くの知見がみられる。語彙の発達について、語彙の量が豊かではなく、語彙の内容が乏しいこと、語の使用を明確に理解していないことが指摘されている（Blanton, R.L., 1968）。構文能力に関しては、機能語の適切な使用、文型の多様な使い分け、語順規則の獲得、内容語の意味範疇化などの点で聴児より著しく劣ることが指摘されている（Blanton, R.L., 1968）。聴覚障害児は、一文あたりの単語数が限られ、文の構造面では単文が多く、複文や重文の使用が極めて少ないと言われている（内山ら, 1978）。いずれも聴児と比較して聴覚障害児は、言語力が劣るといわれており、聞こえにくさに伴う言語面の課題は大きいことが明らかになっている。

3. 2 聴覚障害児のナラティブを扱った研究

現在では、早期診断、補聴器や人工内耳の普及に伴い、聴覚障害児といっても、過ごす環境やコミュニケーション手段はさまざまである。そこで、本稿では①音声使用児（大原・廣田, 2015. 長崎ら, 2000）と②手話使用児（堀口ら, 2015; 堀口, 2014; 稲葉, 2013）に分けて、聴覚障害児のナラティブについて概観していく。

3. 2. 1 音声使用児を対象とする研究

大原・廣田（2015）は自由遊び場面における子ども同士のナラティブを観察し、長崎ら（2000）は自己の経験について語るPNを行わせ、鄭・岡田（1993）は音読したテキストの内容を再生させるFNを行わせて、音声使用児のナラティブについて検討を行っている。

大原・廣田（2015）は、音声を用いる聴覚障害児（生活年齢：6歳～6歳10カ月、6名）と健聴幼児（生活年齢：3～4歳、6名）を対象に、社会的遊び

場面におけるナラティブ構成の発達について検討を行った。その結果、聴覚障害児は子ども同士で遊びの内容を共有し展開を予測し合いながらストーリーを構成していく協同的ナラティブの産出に遅れがみられた。また、遊びのなかでみられるメタプレイ（枠組みから外れた視点から、枠組みの内容や手順について指図、叙述すること）が発話文長から期待できるほど増加しなかった。したがって、聴覚障害児は聴児との遊びの中で、テーマを共有したり、伝達したりすることが難しく、刻々と変化する遊びのストーリーを俯瞰的に理解することが難しいと推察された。

長崎ら（2000）は、聴覚障害児の物語りの発達の特徴について検討するために、①幼児期から学齢期の聴児（年中児10名、年長児10名、小学1年生10名、小学2年生9名、小学3年生10名、小学4年生10名、計59名）における自己の経験の報告活動（PN）について、横断的に報告内容と構成の観点から分析し、物語の発達の特徴をとらえ、②学齢期の聴覚障害児（小学1年生1名、2年生1名、4年生2名、計4名）の報告活動（PN）について縦断的観察を行い、聴児の報告と比較検討をした。その結果、聴覚障害児は聴児と比較して、他者や心的状態への言及の出現とエピソード間・出来事間の時系列化にやや遅れがみられた。

鄭・岡田（1993）は、音声を主なコミュニケーション手段とする聴覚障害児（小学4年生10名、6年生10名、中学2年生15名、計35名）と聴児（小学4年生10名、6年生10名、計20名）を対象に、テキストを音読させた後に再生させる課題（FN）を行った。テキストの構造（設定部・主題部・筋立て部・解決部）と物語における文の重要度から、その時の再生とMISCUE（読み手とテキストの交互作用により、読み手の理解によって産出されるものであり、テキストにはない読み手の音読反応が伴う置き換えや省略、付加などの変化のこと）に基づいて文章理解の特徴について検討を行った。その結果、聴覚障害児もテキスト構造を活用していること、客観的描写の再生に優れていることが分かった。一方で、聴児と比較して、主観的描写が少なく、細かい部分の内容や重要な文の再生が不十分であったり。また、テキストの理解が難しく、複雑となる解決部や重要な内容においてMISCUEが多く見られた。

これらの知見から音声使用児であっても、ナラティブの内容にやや遅れが見られたり、テキストの理解が難しく、複雑である箇所ではMISCUEが多く見られたりすることがわかった。その結果、コミュニケーションに支障が生じていることが想定された。

3. 2. 2 手話使用児を対象とする研究

堀口ら（2015）は、手話使用児が行うPN・FNから話の分かりやすさにつながる要因の検討を行っている。また、堀口（2014）と稲葉（2013）は、ASDを併せ有する聴覚障害児を対象にPN・FNもしくはFNのみを行う課題を行わせて、ASDや聴覚障害の要因によるナラティブの違いについて検討を行っている。

堀口ら（2015）は、聾学校に在籍し、日常的に手話を用いて会話をしている聴覚障害児（小学部2年3名、4年10名、計13名）を対象に、①質問一応答関係検査中の「お風呂の入り方」、②4コマ漫画説明課題、③状況絵説明課題を実施し、自己体験や絵の内容を物語として他人に説明する際の、話の分かりやすさに影響する要因について検討を行った。その結果、話の分かりやすさには、内容の充実度と説明内容の整合性が関与することが明らかになった。また、個人差はあるものの音声の明瞭度が分かりやすさにつながることを推察された。

また、堀口（2014）は聾学校に在籍するASDを併せ有する聴覚障害児（小学部5年2名）を対象に、上述した課題、①質問一応答関係検査中の「お風呂の入り方」、②4コマ漫画説明課題、③状況絵説明課題を実施している。その結果、ASD児の先行研究と共通して、動作主が明確に言及されていないこと、心的状態の表出の少なさなどの特徴が見られた。また、トランスクリプトの内容から検討すると、人物より物や背景に対してより多くの視線を向けていることが明らかになった。堀口ら（2015）における聴覚障害単独児の成績上位群と比較した結果、「お風呂の入り方」と状況絵説明課題では、話の充実度に差は見られなかったが、「お風呂の入り方」では補助的な言葉が多く、状況絵課題では、不適切なところと絵の様子を混同して話していたため評価に差がみられた。4コマ漫画説明課題では、聴覚障害児上位群と比較して、話の充実度が低く、時系列的な順序や動作主の明確な言及が少なかった。手話の表出に関しては、ASDを併せ有する聴覚障害児においては、手形がはっきりせず、動きが小さかったり、手話表出の位置が見にくかったりした。また、接続詞の表現もあまり見られなかった。このことから、相手を意識した手話表出に課題が見られることが示された。

稲葉（2013）は、聴児（小学2・4・6年生各6名、計18名）・聴覚障害児（2年生9名、4年生6名、6年生5名、計20名）・ASD児（19名）・ASDを併せ有する聴覚障害児（8名）を対象に、①数字の追視課題、②顔のマッチング課題、③状況絵課題1、④状況絵課

題2を行い、そのときの視線の動きについても測定を行った。③、④の状況絵課題では、最初に状況絵について説明をさせたのちに、絵に関する質問を行った。その結果、①指示や教示のない自由注視時と質問時では、状況絵の中の要素に対する注視の比率が変化すること、②聴児・聴覚障害児の正答群は、物より人物に対する注視の比率が高くなるのに対し、ASDを有する群ではその比率の差が小さくなることが明らかになった。また、ASD児とASDを併せ有する聴覚障害児の注視パターンと状況絵の説明内容によって、Ⅰ：人物を中心に注視しているが、ASD特有の事物的な説明を行うタイプ、Ⅱ：人物中心に注視しておらず、注視の段階に課題があるタイプ、Ⅲ：人物中心に注視しているものの、聴覚障害ゆえの説明能力の弱さとASD特有の事物的な説明の傾向が複合しているタイプ、Ⅳ：人物中心に注視しておらず、注視の段階に課題があるうえに、聴覚障害ゆえの説明能力の弱さとASD特有の事物的な説明の傾向が複合しているタイプの4つのタイプに類型できると述べている。

したがって、手話使用児がナラティブを分かりやすく語るためには、内容の充実度と整合性、音声の明瞭度が関わるということが明らかになった。ASDを併せ有する聴覚障害児は、ASD児同様、相手を意識して話を行う様子がみられなかったり、人物よりも物に注視したりする傾向が、定型発達児・聴覚障害児に比べ強いことが明らかになった。一方で、個人差もみられ、1つの傾向を見出すことはできなかった。

また、手話使用児を対象にしたナラティブに関する研究は少なく、特にASDを併せ有する聴覚障害児の

ナラティブに関する文献は筆者の知るところ、この2つだけに限られた。今後、稲葉(2013)にみられたように類型化を行うことを想定しながら、手話使用児のナラティブについて検討を行い、特性にあった支援を考えていく必要性が感じられた。

4. まとめ

これまでの知見を表1に整理した。

ASD児の言語面やナラティブの知見には、定型発達児と比較して、何らかの遅れや特異性がみられるものが多かった。認知の段階で特異性がみられることも考えられ、認知とナラティブとの関連について今後検討する必要があると考えられた。また、知見のなかには対象児が少なかったり、個人差がみられたりするものもあった。

聴覚障害児の言語面やナラティブについての知見でも、聴児と比較して何らかの遅れや特異性がみられ、さらに認知の段階でも特異性がみられた。しかし、聴覚障害児のなかでも手話使用児のナラティブについての知見は筆者の知るところ少なく、今後検討していく必要性が感じられた。また、ASD児同様、知見における対象児が少なかったり、個人差がみられたりした。

ASD児、聴覚障害児、ASDを併せ有する聴覚障害児という枠組みに当てはめても、実際にはそれぞれの枠組みの中で個人差があり、実態はさまざまである。今後は実態について類型化することも想定しながら、それぞれの障害児の認知特性を明らかにして支援のあり方を考える必要があると考えられた。

表1 ASD児・聴覚障害児のナラティブについての知見

ASD児		聴覚障害児		定型発達児		
言語理解	語り(ナラティブ)	支援について	一次的要因について	音声使用児		
<p>・指示語の示す位置関係について逆側条件における正答率が低い。</p> <p>・先に実施した条件の視座から切り替えられず、引きずられる。</p> <p>・指示語の内容を特定するための手がかりを探す様子が少ない。</p> <p>・指示語の苦しさに関して、知的能力と心の理論との関連はみられない。：伊藤・田中(2006)、伊藤・田中(2005)</p> <p>・複数の意味を持つ形容詞・形容動詞と名詞の関係について理解が劣る。</p> <p>・複数の意味を持つ形容詞・形容動詞と名詞の関係についての理解と、複数の意味を持つ形容詞・形容動詞の文章内における使い方についての理解は相関がみられる。：根岸・大伴(2014)</p>	<p>・他者視点習得が困難。</p> <p>・非言語手がかりをあまり活用しないため、指示語の使い分けが苦手。</p> <p>・対人志向性の乏しさが言語表出に関連。：伊藤(2006)、伊藤・大嶋(2014)</p> <p>・動詞の変化による主語、目的語の使用に関する感受性を持っている。：伊藤・大嶋(2014)</p> <p>・自由遊び場面において、社会的相互作用伝達機能がほとんどみられない。：佐竹・小林(1989)</p> <p>・FNの課題において、登場人物の心的・情動的状態から出来事を理解していくことの弱さを有している。：李・田中(2011b)</p> <p>・FNとPNの課題ともに、ミクロ構造の未発達により、マクロ構造も未発達な様子がみられた。</p> <p>・特にPNで困難がみられた。：仲野・長崎(2006)</p> <p>・ナラティブにおける困難さの要因(知能・語用・統語力など)は、一人ひとり異なる。：石坂ら(2015)</p>	<p>・ボールでのやりとり行動の訓練により、社会的相互作用の伝達機能を増加することができる。：佐竹・小林(1989)</p> <p>・ユーモア刺激において①人物の顔以外の部分を注視すること、②大きい動作に笑いを表出すること、③コント刺激の方が、漫才刺激よりも面白いと評価する。：永瀬ら(2013)</p> <p>・絵本における視覚認知では、視線の動きとFNの内容に関連はなく、視線における情報入力とFNの構成の乖離が示唆された。：李・田中(2013)</p>	<p>・語用論的能力の問題は、非言語情報処理の失敗、一次的には注意、知覚、記憶、感情、他者理解の障害を基盤として生じ、その典型かつ極端なケースがASD児において認められる。：大井(2002)</p> <p>・人形劇を見ても、おもちゃのアフォーダンスに注目してしまい、一般的な意味を取り込めず、特異なアフォーダンスを利用する。：Loveland(1991)</p> <p>・ユーモア刺激において①人物の顔以外の部分を注視すること、②大きい動作に笑いを表出すること、③コント刺激の方が、漫才刺激よりも面白いと評価する。：永瀬ら(2013)</p>	<p>・協同的ナラティブの産出に遅れがみられる。</p> <p>・メタブレイに関する発言が少ない。</p> <p>・遊びの経過についていくことができていない。：大原・廣田(2015)</p>	<p>・話の分かりやすさには内容の充実度と説明内容の整合性、音声の聞き取りやすさが関与する。ただし個人差がみられる。：堀口ら(2015)</p> <p>ASDを併せ有する聴覚障害児</p> <p>・動作主が明確に言及されておらず、心的状態の表出が少ない。</p> <p>・人物より物や背景に対してより多くの視線を向けている</p> <p>・相手を意識した手話表出に課題が見られる。</p> <p>・主旨がずれたり、時系列に述べられていなくなったり、動作主の言及が少なかったり、話の内容の質が劣っていた。：堀口(2014)</p> <p>・聴覚、聴覚障害児と比較して、物より人物に対する注視が高くなる比率の差が小さい。：稲葉(2013)</p>	<p>・話す際に、聞き手の既存の知識や提供すべき内容について意識する。：Colleら(2008)</p> <p>・話す内容は、他者と自分・人と人の関係、他者の状態について注目する。：李・田中(2011b)</p> <p>・ナラティブとして語ることに、現前の「わたし」「あなた」ではない「第三者」の立場や意図を表現することが可能になり、ナラティブが心の理論の発達に必要とされる。：熊谷(2004)</p> <p>・ナラティブは心の理論を必要とし、また心の理論を育む。：仲野・長崎(2009)</p>

※FN:空想のストーリーについて語るフィクションストーリー、PN:自分の経験について語るパーソナルストーリー

参考文献

- 1) American Psychiatric Association (1994) Diagnostic and statistical manual of mental disorder (4ed.) (DSM-IV), Author, Washington, DC.
- 2) Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., & Frith, U. (1985) Does the autistic child have a “theory of mind?”. *Cognition*, 21, 37-46.
- 3) Blanton, R. L. (1968) Language learning and performance in the deaf. In Rosenberg, S. and Koplin, J. H. (Ed.) *Developments in Applied Psycholinguistics Research*. The Macmillan Company.
- 4) 鄭仁豪・岡田明 (1993) 聴覚障害児の文章理解の特徴に関する研究—テキスト構造における再生とMISCUEによる検討—. *心身障害学研究*, 17, 87-98, 1993.
- 5) Colle, L., Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Van der Lely, H. K. J. (2008) Narrative discourse in adults with high-functioning autism or Asperger syndrome. *Journal of Autism and Developmental Disorder*, 38, 28-40.
- 6) Du Bois, J. W. (1987) The discourse basis of ergativity. *Language*, 63, 805-855.
- 7) 深間内文彦・西岡知之・松田哲也・松島英介・生田目美紀 (2007) 聴覚障害における視覚情報処理特性—アイマーク・レコーダーによる眼球運動の解析—. *筑波技術大学テクレポ* Vol.14, Mar. 2007.
- 8) Frith, U. (1989) *explaining the enigma*. Oxford, Blackwell.
- 9) Happe, F., & Firth, U. (2006) the weak coherence account: Detail-focused cognitive style in autism spectrum disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorder*, 36, 5-25.
- 10) 保坂裕子 (2014) ナラティブ研究の可能性を探るための一考察〈Who-are-you?〉への応えとしての〈わたし〉の物語り. *兵庫県立環境人間学部研究報告* 16号, 2014.
- 11) 堀口昂誉・濱田豊彦・安田遙・石坂光敏 (2015) ろう学校在籍児の談話分析に関する一研究—映像評価とトランスクリプト評価の対比を中心に—. *東京学芸大学紀要総合教育科学系* II 66 : 305-310, 2015.
- 12) 堀口昂誉 (2014) ろう学校在籍児の談話分析に関する一研究 (2). *平成26年度東京学芸大学修了論文*.
- 13) 稲葉啓太 (2013) 障害児の状況理解における眼球運動に関する一研究—聴覚障害児, ASD児の状況画注視時における視線分析—. *平成25年度東京学芸大学修士論文*.
- 14) 石坂光敏・濱田豊彦・大鹿綾・稲葉啓太・堀口昂誉・喜屋武睦 (2015) 通級指導を受けているASD児の談話能力に関する一研究. *東京学芸大学紀要総合教育科学系*, 66 (2) : 295-303.
- 15) 伊藤恵子・田中真理 (2006) 指示詞コ・ソ・アの理解からみた自閉症児の語用論的機能の特徴. *発達心理学研究* 17 (1), 73-83.
- 16) 伊藤恵子・田中真理 (2005) 自閉症児における指示詞コ・ソ・アの理解と他者視点習得能力および知的能力との関連. *東北大学大学院教育学研究科研究年報* 第54集, 第1号, 339-352, 2005.
- 17) 伊藤恵子 (2006) 指示語コ・ソ・アの表出からみた高機能自閉症児における語用論的機能の特徴. *コミュニケーション障害* 23, 169-178, 2006.
- 18) 伊藤恵子・大嶋百合子 (2014) 自閉症スペクトラム障害児の動詞の項の省略と語彙化のパターンからみた語用論的能力. *特殊教育学研究*, 52 (2), 75-84, 2014.
- 19) 李熙馥・田中真理 (2011a) 自閉性スペクトラム障害者における研究の動向と意義. *特殊教育学研究*, 49 (4), 377-386, 2011.
- 20) 熊谷高幸 (2004) 「心の理論」成立までの三項関係の発達に関する理論的考察—自閉症の諸症状と関連して—. *発達心理学研究*, 15, 77-88, 2004.
- 21) 李熙馥・田中真理 (2011b) 自閉症スペクトラム障害児におけるフィクショナルナラティブの特性と発達—ある出来事をどのようにとらえるのか—. *東北大学大学院教育学研究科研究年報* 第60集, 第1号, 345-361, 2011.
- 22) 李熙馥・田中真理 (2013) 自閉症スペクトラム障害児のナラティブにおける視線による情報入力の特徴. *東北大学大学院教育学研究科研究年報* 第61集, 第2号, 171-184, 2013.
- 23) Loveland, K (1991) *Social affordances and interaction II : Autism and affordances of the human environment*.
- 24) 永瀬潤・横田普務・李熙馥・滝吉美知香・松崎泰・菅原愛理・田中真理 (2013) 自閉症スペクトラム障害者はいかに言語的やりとり及び視覚的補助要素のあるユーモアを楽しむのか—視覚による情報入力・面白さの評価・笑いの表出に焦点を当てて—. *東北大学大学院教育学研究科研究年報* 第62集・第1号, 235-255, 2013.
- 25) 長崎勤・鈴木和子・長崎裕子 (2000) 子どもはどのようにして自己経験を物語るのか? : 健聴児と難聴児の報告活動の分析を通して. *心身障害学研究*, 24, 123-135, 2000.
- 26) 仲野真史・長崎勤 (2009) ナラティブの発達と支援. *特殊教育学研究*, 47, 183-192, 2009.
- 27) 仲野真史・長崎勤 (2006) 健常児と自閉症児におけるナラティブの産出—フィクショナルストーリーとパーソナルナラティブの分析から—. *心身障害学研究*, 30, 35-47, 2006.
- 28) 根岸由佳理・大伴潔 (2014) 高機能自閉症スペクトラム障害児における連体修飾語の意味理解—形容詞・形容動詞の用法からの検討—. *東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要* 第10集, pp.100-111.
- 29) 能智正博 (2006) “語り”と“ナラティブ”のあいだ, 能智正博 (編), 〈語り〉と出会う—質的研究の新たな展開に向けて—. *ミネルヴァ書房*, 12-72.

- 30) 大原重洋・廣田栄子 (2015) 聴覚障害児の社会的遊びにおける協同的ナラティブ産出とメタプレイとの関連性の検討. 音声言語医学56 : 154-165, 2015.
- 31) 大井学 (2002) 「誰かお水をはこんでくれるといいんだけどな」: 高機能広汎性発達障害へのコミュニケーション支援. 聴能言語学研究19, 224-229, 2002.
- 32) 大鹿綾・稲葉啓太・渡部杏菜・長南浩人・濱田豊彦 (2014) 発達障害に関する第二回全国聾学校調査について—第一回調査との比較を中心に—, 聴覚言語障害, 42 (2), 51-61.
- 33) 佐竹真次・小林重雄 (1989) 自閉症児における語用論的伝達機能の発達に関する研究. 特殊教育学研究, 26 (4), 1-9, 1989.
- 34) Silver, M. & Oakes, P. (2001) Evaluation of a new computer intervention to teach people with autism or Asperger syndrome to recognize and predict emotions in others. *Autism*, 5, 299-316, 2001.
- 35) 下中邦彦 (1981) 新版心理学事典.
- 36) Tager-Flusberg, H. (1981) On the nature of linguistic functioning in early infantile autism.. *J. Aut. Devel. Disor.*, 11 (1), 45-56, 1981.
- 37) 内山喜久雄・佐藤泰正・吉江信夫・岡田明 (1978) 視覚聴覚障害事典.
- 38) Wetherby, A. and Prutting, C. (1984) Profiles of communicative and cognitive-social abilities in autism children.. *J. Spee. Hear. Res.*, 27, 364-377, 1984.
- 39) 山田有紀・笠井新一郎 (2011) 高機能広汎性発達障害児の言語能力—ITPAの分析から—, 音声言語医学52 : 366-371, 2011.

ASD児・聴覚障害児のナラティブに関する文献検討

A Review on the Studies about Narrative of Children with Autism Spectrum Disorder and Deaf Children

岩田 能理子*¹・濱田 豊彦*²・喜屋武 睦*¹
天野 貴博*¹・鈴木 友里恵*¹・石坂 光敏*³

Noriko IWATA, Toyohiko HAMADA, Chikashi KYAN,
Takahiro AMANO, Yurie Suzuki and Mitsutoshi ISHIZAKA

支援方法学分野

Abstract

The aim of this study is that we survey about language and cognition of children with autism spectrum disorder and deaf children from advanced studies, and discuss the issues of further studies to support for the deaf children with autism spectrum disorder. Most of advanced studies show that children with autism spectrum disorder and deaf children have slow development or specificity. Some studies have only a small of subjects and depend on the individuals. And studies in children using sign language are very few as long as we know and we have to discuss the issues of further studies in children using sign language. We separate categories: children with autism spectrum disorder, deaf children, and deaf children with autism spectrum disorder, but actual states are various. We have to discuss how to support that depends on actual states with expecting to classifying in patterns with actual states.

Keywords: children with Autism Spectrum Disorder, deaf children, narrative

Department of Support Methods for Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本稿は、これまでの先行研究を概観し、それらの知見からナラティブに関連するとされる①ASD児の言語面・認知面における遅れや特異性について、②聴覚障害児の言語面・認知面における遅れや特異性について、そして③ASDを併せ有する聴覚障害児の指導・支援に関して今後検討すべき点を提言することを目的としたものである。ASD児・聴覚障害児の言語面や認知面に関する知見の多くは、定型発達児・健聴児と比較して、何らかの遅れや特異性がみられるものが多く、知見のなかには対象児が少なかったり、個人差がみられたりするものもあった。また、聴覚障害児のなかでも手話使用児のナラティブについての知見は筆者の知るところ

*1 Graduate School of Tokyo Gakugei University

*2 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

*3 Tokoji Elementary School (3-24-1 Shin-machi, Hino-shi, Tokyo, 191-0002, Japan)

る少なく、今後検討していく必要が感じられた。ASD児、聴覚障害児、ASDを併せ有する聴覚障害児という枠組みに当てはめても、実際には個人差があり、実態はさまざまである。今後はそれぞれの実態について類型化することも想定しながら、それぞれの類型にあった指導・支援のあり方を考える必要があると考えられた。

キーワード: ASD児, 聴覚障害児, ナラティブ